

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

多数の人に同じ内容のメールを送る場合をのぞき、一般に、個人対個人でメールをやりとりする場合は、本人たちにその①イイトがなくともメールの内容は秘密みたいなものです。

たとえば、恋人や家族がメールしているのをたまたま見かけ、なにか隠しごとでもされているような、②いやな気分になったこととはありませんか？ 時どき、③そのような疑念を抱いていることが表情か態度で相手に伝わったのか、相手がメールの内容を見せてくれるということがあります。見てみると、どうということのない内容だったので、なんて自分は④嫉妬深いんだろう、疑り深いんだろう”と恥ずかしくなったり、反省したり・・・、こういう経験をお持ちの方もいらっしゃるのでは、と想像します。

このようにケータイメールは、本人に隠すイイトなどなくても「秘密」を感じさせます。ですから、ここでいう「秘密作用」とは、秘密をつくり出す作用ではなく、秘密を持っているような感じを相手に与える作用のことなのです。

では、⑤どうしてケータイメールは、「秘密」があるかのように相手に感じさせるのでしょうか。

まず、場所に⑥拘束されないケータイは、いつでもどこでも「見えない人たち」とつながることを可能にする道具でした。その「見えない人」は「私」にも見えないと同時に、目の前にいる相手にも見えません。ただし、目には見えなくても、その「見えない人たち」がだれなのか「私」にはだいたい見当がついています。しかし、相手にはある程度しかわかりません。相手の知らない人とも「私」はつながる可能性があり、「私」はそのことを知っています。【A】

⑦このことが、相手もまた「私」の知らない人とつながっていることを「私」に予感させます。相手はケータイを通じてどんな人とのような関係を持っているのか、「私」にはわからないわけです。これが「私」には秘密と感じられます。【B】

このようなことは別にケータイとは関係ないのではないかと、という反論がありうると思います。たとえば、ケータイのない時代でも、相手が「私」の知らない人とならなかの関係を持っているだろうことは、「私」にはわかっている。けれども、だからといってそれが「私」に「秘密」と感じられたことはない、という反論です。

たしかに⑧この反論のとおりです。しかし、ケータイのなかった時代であれば、相手が「私」といる時は、相手が「私」以外の人とつながる可能性はほとんどありません。いわば、そのとき対面している「私」以外の人間関係をほかの場所に置いていく、という感じなのです。場所と人間関係は切り離せないからです。

一方、「脱場所性」を⑨ソナえたケータイは、場所と人間関係を切り離すことができます。相手と「私」がどこにいるかにかかわらず、つながることができるからです。だから、相手がたとえ「私」といても、いまここにいない「私」以外のだれかとつながることができません。ケータイは「⑩」を携帯する「道具」なのです。

それだけではありません。ケータイは、相手が「⑩」を携帯「していることを「私」にはっきり見せつけるのです。

このような経験はないでしょうか。「あなた」は友人とおしゃべりをするためにふたりで喫茶店などにやってきました。ふたりはテーブルをはさんで向かい合って腰かけました。すると、相手はおもむろにケータイを取り出して、「時計代わりに」などといい、折られたんであったケータイを開いてテーブルの上に置くのです。それをみて「あなた」は不快な感じがした、という経験です。

私の場合、このような状況がとていやです。「緊急の用事があった、〇〇さんから返事がそろそろあるだろうから・・・」などと断ってくれた場合や、相手がとても忙しい合間をぬって会ってくれている場合などはそう不快でもありません。けれども、このような場合以外では、なにかいやな気分になってしまいます。【C】

このとき、「私以外のだれかとつながりたいのなら、わざわざ私と会ってくれなくてもいいよー」といいたい気分におそわれます。このようにいいなくなるのは、ケータイが相手の人間関係をこちらに見せつけるからです。相手につながるうとする「私」以外の人間の存在をはっきりさせるからです。そして、相手が見えない人とならうとしている意思を感じさせるからです。同時に、「私」とのつながりをそれほど重要視していないように感じさせるから、「私」は不快に感じるわけです。【D】

学生に訊きいてみましたら、折りたたみ式のケータイを折りたたんだままであれば目の前に置かれてもなんとも思わないが、開いておかれるといやな感じがする、という答えが多かったように思います。私の場合は、折りたたんだままでも不快に感じてしまいますので学生たちより「⑪カンヨウ」ではありませんが、いずれにしても、相手にケータイを目の前に出されることで不快な思い

をするのは、私だけのことでないでしょう。

やや話がそれてしまいました。ここでいいことは、ケータイは「⑩」を携帯する」道具であるために、相手が「私」の他にも人間関係を持っていることをはつきり「私」に知らせます。それを知らされた「私」は、しかし相手がどんな人と関係を持っているのかまでは知らされません。これが秘密に感じられるわけです。ふたりが親密な仲であればあるほど、このことは秘密と感じられたり、隠しごとのように受けとられたりするでしょう。

⑫これがケータイがつくり出す秘密です。

『日本はなぜ諍いさかいの多い国になったか』森真一

問一 傍線部①・④・⑥・⑨・⑪の片仮名は漢字に、漢字を平仮名に直しなさい。

問二 傍線部②「いやな気分」と同じ意味を表す二字の熟語を文中から抜き出しなさい。

問三 傍線部③「そのような疑念」とはどのような疑念か。文中の言葉を使って二十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 傍線部⑤「どうしてケータイメールは、『秘密』があるかのように相手に感じさせるのでしょうか」とあるが、ケータイの持つどんな特質がそのように感じさせるのか。文中から四字で抜き出しなさい。

問五 傍線部⑦「このこと」とはどういうことか。文中の言葉を使って、三十五字以内で書きなさい。(句読点・記号は字数に入れません。)

問六 次の文は、本文中のどこに入るか。最も適当な場所を【A】～【D】から選び、記号で答えなさい。

たとえ相手がそれを隠すつもりはなくてもです。

問七 傍線部⑧「この反論」とはどのような反論か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相手はいつでもどこでも「私」以外の人とつながることが可能という反論。

イ 人はだれでも秘密を持っていても、それを秘密とは感じないという反論。

ウ 人はいろんな人と関係を持つが、それぞれの人との関係を知ることが不可能という反論。

エ 人はいろんな人と関係を持つが、それを秘密と感ずることとケータイとは関係ないという反論。

問八 空欄部⑩に当てはまる最も適当な言葉を文中から四字で抜き出しなさい。

問九 傍線部⑫「これがケータイがつくり出す秘密です」とあるが、ケータイの「秘密作用」の説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手が誰かと親密な関係をつくっているのではないかと感じさせる作用。

イ 相手が予想や期待に反する振る舞いをしたかのように感じさせる作用。

ウ 相手が「私」を仲間を選んでくれるだろうかと不安を感じさせる作用。

エ 相手が誰と関係を持っているのかかわらないと感じさせる作用。

オ 相手がどこで何をしているのかかわらないと感じさせる作用。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

唯がほんとうにひさしぶりに自分から持ちかけてくれた話を、梓が拒否する理由はどこにもなかった。

すぐに、「体験学習」を学校に申しこんだ。十一月前半の三連休の一泊二日。場所は新潟県の佐渡島だった。どういうわけか、唯は佐渡島にこだわった。

「高松のうどん作り体験っていうの、よさそうだな。出雲の焼き物作りっていうのも楽しそう。そっちのほうがよくない？」

①梓はほかのふたつのオプションも勧めてみた。唯は②かたくなな様子で首を横に振った。

「佐渡に行く」

小さくつぶやく。梓は、下を向いたままこちらを見ようとしないう目を覗きこんだ。逃げるように横を向くと、今度はもっと大きな声で唯は言った。

「トキ、見たいし」

それでようやく、梓は、娘が鳥に——鳥ならなんでも、というわけではなく、この絶滅の危機にさらされている特別な鳥に、興味を持っていることに気づいたのだった。

佐渡島での体験学習は、地元の小中学生とともに、トキについて学び、トキの③餌場となる④「ビオトープ」の整備をすること、そしてその周辺の生物の生態調査をすることだった。学校からの資料を見て、佐渡トキ保護センターで生まれ育ったトキを野生に復帰させるために近々放鳥が予定されている、ということを知り、梓は初めて知った。

鳥だの天然記念物だの野生復帰だの、そんなことにはまったく無関心だった。⑤神経症の娘、日々の仕事、かつかつの暮らし。④いつも混雑する心には、寸分の隙間もない。地球温暖化だエコだと⑥サワがれていても、いっさい関心が⑦湧かなかつた。暮らしに余裕のある人がブームに乗せられているだけじゃないか、と冷めた目で見ていた。

資料には、トキという鳥がたどった運命について簡単に書かれていた。

「ニッポニア・ニッポン」という学名を持つこの鳥は、かつては日本中に⑦セイソクしていたらしい。しかし、明治以降激減し、昭和九年にはすでに天然記念物に指定されたという。戦後もどんどん減っていき、全鳥捕獲に乗り出して人工繁殖を図るもうまくいかず、とうとう最後の一羽になった。その「キン」と名づけられたトキも、平成十五年に死亡。これで「日本の野生のトキ」は絶滅したことになる。

ただし、キンが死亡するまえには、中国から若いトキのカップルが贈られ、人工繁殖に成功し、いまや百羽を超えるほどになった。

そこで近々、そのうちの十羽を野に放つ。野性に復帰させるのだ。

「へえ、野性に復帰ねえ。だから田んぼが必要なわけね。トキが餌を取ることができる水田が」

すっかり心得て、梓は思わず声に出して言った。唯は黙っていたが、⑧その日はいつもと違った。母の言葉に、こくりとうなずいたのだ。そして、ぼそつと返した。

「だから、健康なドジョウがすむ田んぼにしなくちゃだめなんだよ」

はつとした。唯はもとどおりむつつりと口を結んで、両手の中のゲーム機をさかんにいじっている。

健康なドジョウ。娘が不思議な言葉を口にしたのを聞いて、梓は⑨微笑を禁じ得なかった。

⑩ずつと遠くのほうで、ほんの一瞬だけ、光が——トンネルの出口が見えたような気がした。

島、というところを訪れるのは、梓にも唯にもこれが初めてだった。生まれて初めて乗ったフェリーがよほど珍しかったのか、二時間余りの船旅を、唯は一度も客室に戻ることもなく、ただ海に向かい合って過ごした。好天で思ったよりは寒くはなかったが、そんなにも海風に吹かれ続けて風邪を引きはしないかと、梓は気を揉んだ。客室の窓から唯の後ろ姿をずつと見守っていたが、一時間くらい経ったところで我慢できなくなった。ポストンバッグからこげ茶のチェックのショートコートを取り出すと、唯の肩にかけてやる。か細い肩は、すんなりとそれを受け止めた。梓はそのまま少し離れたところに立って、港に着くまで自分もここに

よう、と決めた。

水平線のかなたにぼつりと姿を現した島が、ゆつくりと成長していき、やがて海景のすべてを埋めつくした。尖った山の頂に向かつて、鮮やかな絵具を散らしたように紅葉が駆け上がっているのが見える。水蒸気にうっすらと白くかすむ様子は、まぼろしのようなようだ。

「きれいなね」

すなおな言葉が口を衝いて出た。唯は手すりにつかまっただけで動かない。その両手には、しっかりと力がこもっているのがわかる。

「遠くまでよう来てくださいました。この連休プログラムで東京からおいになったんは、おたくさんたちだけですよ」

港で梓たちを出迎えてくれたのは、地元の注3 NPO代表、仲川 努なかがわつとむだった。人懐ひとなつっこい笑顔で、さかんに、よう来たよう来た、と繰り返す。唯は最初にひとつ、ぺこりとお辞儀をしたが、それきり下を向いてしまっている。努のほうは初対面の少女が人見知りをするなどどつくに心得ているようで、まったく気にもとめず、さあ乗った乗ったと母子をワゴン車の後部座席に乗せた。そして、ハンドルを握りつつ、あれこれと自分の関わるプログラムについて説明を始めた。

トキ野生復帰プロジェクトには、行政以外にも複数のNPOが関わっている。努のNPO「トキ・キッズねっと」は、トキの野生復帰のためのワークショップ参加を通じて、全国の小中学生の交流を促すことを活動の目的としていた。そして佐渡の魅力を知ってもらい、地域の活性化を目指す、というものだった。

「と言えばまあ、格好ええかもしれないけど。正直、農村もカソカソ化が進んで、農業の跡を継ぐもんもねえでね。子供のうちに農業のこと、いいことも悪いことも見せておかんかったら、佐渡はおろか、日本自体このさき絶滅するしかねえんじゃないか。そんなふうにも思っかね」

「絶滅、ですか」

ずいぶんおおげさだな、と思いつつながら、梓は気の抜けた相槌あいづちを打ったが、隣に座っている唯は、まっすぐに顔を上げて努の話を

聞いている。努はバックミラーでその様子を見ると、今度は唯に話しかけた。

「ええと、唯ちゃん……だよな？ 確か、中学二年生だったね。うちの坊主ぼんずと同一年だ。よろしく頼むね」

「え。そうなんですか」

⑧ 梓はつい困惑の入り混じった声を出してしまった。プログラムでは、地元の農家に一晚泊まることになっている。女の子のいるお宅にお世話になりたい、とリクエストを出しておいたのだが、どうやら聞き入れられなかったようだ。

ただでさえ他人と接するのが苦手な娘が、いきなり見知らぬ同い年の少年とコミュニケーションなどできるはずがない。

ここまで連れてはきたものの、せっかく開きかけた唯の心のドアがまた閉ざされてしまうのではないかと、不安が頭をもたげてくる。努は梓の動揺に気づくはずもなく、愉快そうに話し続ける。

「まあわんぱくを絵に描いたようなやつでして。多少ガサツなんでしょう、許してやってください。トキのことについては、むっさんこ詳しいけん。うちは親父も、そのまた親父もトキ命、ですんでね。正真正銘、四代続くトキオタクです」

「四代も？」

梓があまりにも意外そうな声を出したからか、努は少し笑った。

「昭和の初めからですんでね。その頃はまだ、このへんでトキが群れて飛んでいたそうですよ。私はもちろん、そんな風景は見たことねえですが」

日の光があふれる空をトキの群れが飛べば、その翼はオレンジがかった薄桃色に輝いた。朱鷺色とぎいろ、という色の名は、唯一無二、このトキの翼のためにだけ生まれたのだ。

それはそれは美しかった。田畑に積もった雪に照り返す日光を浴びて飛ぶトキの群れほど、美しいものはこの世になかった。少なくとも、努の祖父の時代までは。

「まあ、これから順々に野生復帰させて、いずれいつぱいに群れたトキがこのへんを飛ぶようになれば、と思うけるも。道は険しく、遠いからね」

九月末に十羽のトキが放鳥されていた。すぐに環境になじんで、順当に増えていくものだろう、と簡単に梓は考えていたが、どうやらそうでもないらしい。放鳥されたばかりの十羽も、厳しい冬を乗り越えられるかどうか。もうすぐに、トキたちは「自然」に試されることになる。

この二日間は、子供たちとともにトキの舞い飛ぶ明るい未来について語られるものだと思っていたが、いきなり現実的な話をされて、梓はますます困惑してしまった。

唯は再びそっぽを向いて、黙りこくっている。

延々と続く刈り入れの終わった田畑を、真昼の太陽が照らしている。いっぱい広がる青空と、空っぽの田んぼ。朱鷺色の翼は、どこにも見出せない。

『斉唱』原田マハ

注1 ビオトープ・・・さまざまな生物が多数共生する環境空間のこと。唯が「体験学習」をした村では、打ち捨てられていた水田の跡地を特にトキのためにビオトープとして整備していた。

注2 神経症・・・不安・緊張など心理的原因で起こる心身の不安定な状態。

注3 NPO・・・非営利団体のこと。社会のためになるサービスを提供し、営利を目的としない、民間の団体のこと。

問一 傍線部①「梓はほかのふたつのオプションも勧めてみた」とあるが、「唯」がほんとうにひさしぶりに自分から持ちかけた話なのに、「梓」がそのようなことをしたのは、何に気づいていなかったからか。十五〜二十字で説明しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問二 傍線部②「かたくなな様子で首を横に振った」・④「いつも混雑する心には、寸分の隙間もない」・⑨「微笑を禁じ得なかった」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

② かたくなな様子で首を横に振った

ア 自分の考えがはっきりしないので、判断に迷う様子。

イ 自分の考えを守り、他人の説得を聞き入れない様子。

ウ 自分が悪いことはわかっていても、それを認めない様子。

エ 愚かなために状況を理解できず、苦しんでいる様子。

④ いつも混雑する心には、寸分の隙間もない

ア 常に生きていくのに精一杯で、心にゆとりがないこと。

イ 多くのことが気になり、常に何かに夢中になること。

ウ 関心を抱くことが多すぎて、暇な時間がないこと。

エ 生きていくのに考え続けて、常に緊張していること。

⑨ 微笑を禁じ得なかった

ア 自分がどんなに努力してもほほえむことができなかった。

イ 唯がほほえむのをどうにかしてやめさせようとした。

ウ 自分がほほえんでしまうのをどうしても止めることができなかった。

エ 唯がほほえんでしまうのをどうしても止めることができなかった。

問三 傍線部③・⑤・⑥・⑦・⑫について、片仮名を漢字に、漢字を平仮名に直しなさい。

問四 傍線部⑧「その日はいつもと違った」とあるが、いつもならこんな時に「唯」はどのような態度をとると考えられるか。簡潔に説明しなさい。

問五 傍線部⑩「ずっと遠くのほうで、ほんの一瞬だけ、光が——トンネルの出口が見えたような気がした」とあるが、この時、

「梓」は どんな気持ちになったのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 梓は、トキに興味を持ち、行動を始めた唯の言葉を聞いて、トキを絶滅の危機から救う道が唯たち若者の力によって発見される日が遠い将来必ずやってくるような気持ちになったこと。

イ 梓は、感情を表面に表さなくなった唯にどう接すれば良いか分からなくなって苦しんでいたが、今の唯の言葉を聞いて、ほんのわずかに将来の希望が見出せたような気持ちになったこと。

ウ 梓は、自分の言葉に対してぼそっと返事をしたあと、ゲーム機をいじっている唯の姿を見て、娘の心を癒してやることのできる方法がとうとうみつかったという気持ちになったこと。

エ 梓は、いつもは話もせず心を閉ざしている唯が、佐渡に来てから自分に対して心を開き始めているのを感じて、娘と同じように、自分も明るく希望に満ちた気持ちになつていくこと。

問六 傍線部⑪「唯は手すりにつかまっただま動かない。その両手には、しっかりと力がこもっているのがわかる」とあるが、その時の「唯」の気持ちを表す言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母への反発 イ 母への感謝 ウ 海への恐怖 エ 自然への感動 オ 未来への不安

問七 傍線部⑬「梓はつい困惑の入り混じった声を出してしまった」とあるが、「梓」はなぜそのような態度をとったのか。その理由を八十〜百字で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 本文全体を通してうかがえる、佐渡島での「体験学習」を希望した「唯」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選

び、記号で答えなさい。

ア 絶滅の危機にさらされていたトキを人工繁殖させて見事に野性復帰を実現した、行政と民間のNPOが協力して運営されている、トキ復帰プロジェクトとはどのようなものかを知りたいという心情。

イ 絶滅の危機にさらされてはいるが、人工繁殖によって種を維持し、人々の努力によって野性に復帰しようとしているトキについてもっと深く知り、自分自身の目で佐渡の上空を飛ぶ姿を見たいという心情。

ウ 絶滅の危機にさらされてはいるが、人工繁殖によって種を維持し、人々の努力によって野性に復帰し、上空を自由に飛ぶトキの姿を母に見せることによって、母による束縛から逃れたいという心情。

エ 学校でも家でも、人とコミュニケーションをとることが難しく、生きることが苦しい毎日からなんとかして逃れて、島と
いう他から隔絶した場所に身を置き、生きる力を取り戻したいという心情。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

(相談)

(悪がしい者)

(かいがない)

ある時、ねずみ大勢集まりて談合しけるは、「いつも、かの猫という徒ら者に捕らるる時、千度悔ひても、その詮なし。かの猫、

(つかまらない心がまえ)

声を立てるか、足音でもすれば、かねて用心して捕られぬ覚悟をもするなれども、ひそかに近寄りて来る①ゆゑ、折々油断して捕

らるるなり。②いかにせば良からん」と言ひければ、一つのねずみ進み出でて申しけるは、「それには、何より良き手段あり。かの

(もし付けて置いたならば)

(決して油断はないだろう)

(そうするべきだ)

猫の首へ鈴を付け置かば、たとえ足音はせずとも、③こなたに油断はあるまじ」といふにぞ、皆々「もつとも然るべし」と言ひけ

るが、大勢のねずみの中より、④誰あつて「猫の首へ鈴を付けに行かう」と言ふ者なければ、つひにその談合は止みにける。

(考え)

(具体策)

その如く、人も後先の勘弁なく、了簡ありげに口を叩く者は、ねずみに等しく、つひには恥をかくものなれば

⑤

と思

ふくし。

『伊曾保物語』

問一 傍線部①「ゆゑ」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部②「いかにせば良からん」とは「どうすればよいのだろう」という意味だが、そう言ったのはなぜか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 猫は用心深く準備をして近づいてくるので、いつも我々ねずみは逃げ腰になってしまから。

イ 猫は大声をあげながら近づいてくるので、いつも我々ねずみは圧倒されてしまうから。

ウ 猫は声も立てずに静かに近づいてくるので、いつも我々ねずみはすきをつかれてしまうから。

エ 猫は声を変えながら徐々に近づいてくるので、いつも我々ねずみはだまされてしまうから。

問三 傍線部③「こなた」とは何を指すか。文中から抜き出しなさい。

問四 傍線部④「誰あつて『猫の首へ鈴を付けに行かう』と言ふ者なければ」について、なぜ誰も猫の首に鈴をつけようとしなかったのか。二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 空欄部⑤に当てはまることわざのうち最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア さるも木から落ちる イ 転ばぬ先のつえ ウ 石の上にも三年 エ 口は災いの門